

斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第2次報告

加藤 博文・布施 和洋・小林 彩花・山添 晶久
濱野 由香里・安田 龍平・岩波 連・内山 晋吾

060-0810 札幌市北区北10条西7丁目, 北海道大学大学院文学研究科北方文化論講座

Preliminary Report of Recording and Mapping for Study at the Ikushina-Kita Kaigan Site, Shari, 2008 Field Season

KATO Hirofumi, FUSE Kazuhiro, KOBAYASHI Ayaka, YAMAZOE Akihisa,
HAMANO Yukari, YASUDA Ryuhei, IWANAMI Ren & UCHIYAMA Shingo

Graduate School of Letters, Hokkaido University, N10W7 kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0810, Japan. h-kato@let.hokudai.ac.jp

はじめに

知床半島地域における北海道大学による考古学調査研究は、30年を超える歴史を有する。特に地元斜里町の支援を受けて1976年に文学部附属北方文化研究施設が斜里分室を開設した以降は、主に先史海洋狩猟民文化であるオホーツク文化の調査研究を蓄積してきた(大井1984ほか)。

その後、大学内の組織改編などの影響を受けて一時の休止期を挟んだが、2004年度からはこれまでの調査研究活動に加えて、学生実習を主体とした教育活動を斜里町立知床博物館の支援協力を受けながら進めてきている。2004年度から実施してきた取り組みの背景については、先の報告において概要を述べてあるので参照いただきたい(加藤ら2005)。

今回の報告は、2004年度の第1次調査に引き続き2008年秋に実施した第2次調査の概要報告である。先の第1次調査においては、大きく分布を異にする堅穴I群と堅穴II群を確認することができ、また堅穴内のテストピットの所見からトビニタイ文化期からアイヌ文化期に至る遺跡の形成過程が確認された(加藤ら2005)。特に、3号堅穴覆土上層において1739年降下の樽前a火山灰(以下Ta-aとして表記する)の直下より穿孔をもつヒグマ頭骨1体を検出し、これまで報告事例の少ない

19世紀を遡るアイヌ文化期の熊送り場遺構を確認することができた(佐藤2005)。

2008年度の第2次調査は、このような第1次調査の成果を引き継ぎ、さらに本遺跡の全容の把握と基礎的資料の蓄積を目指して計画実施されたものである。

遺跡の概要

以久科北海岸遺跡(北海道教育委員会登録番号: I-08-041)は、オホーツク海に面し東西に幅広く伸びる砂丘上、斜里町網走南部森林管理署1142林班に立地する遺跡である(図1)。

この遺跡の位置する砂丘は、海岸沿いに東西に形成された6列の砂丘列の内、砂丘Iに属する(荒田ら1979)。遺跡が立地する砂丘列は、全体で東西方向に3km、南北方向に300-600mの奥行きを測る。砂丘列の特徴として北西-南東方向に斜行するいくつもの尾根や谷によって形成されている点を指摘できる。砂丘の標高は2-30mにわたり、起伏に富んでいる(図2)。

この砂丘周辺には数多くの遺跡が知られている。遺跡の西端部にあたる旧斜里川の砂丘段丘上の舌状部、標高17m地点にはアイヌ文化期のガツタンコ1チャシが所在し、同じく8m地点にはガツタンコ2チャシが所在する。また砂丘北西側の海



図1. 遺跡位置図(国土地理院発行1/25000地形図しやりNK-55-31-5-1, 2を基に作図). 1: 以久科北海岸遺跡. 2: 谷田遺跡. 3: 以久科砂丘南遺跡. 4: 尾河台地遺跡. 5: タンネウシ貝塚. 6: ガッタンコ貝塚. 7: ガッタンコ1チャシ. 8: ガッタンコ2チャシ. 9: 禅竜寺遺跡. 10: 本町2遺跡. 11: 貯木場遺跡. 12: 本町3遺跡. 13: 本町1遺跡. 14: 半沢公園遺跡. 15: 栄町神社遺跡. 16: 楓ヶ丘遺跡. 17: クシュンコタン遺跡. 18: ウエンベツ河口遺跡. 19: 須藤遺跡. 20: ビラガ丘遺跡.

岸線沿いの低地にはガッタンコ貝塚が知られている。ガッタンコ1チャシは、砂丘先端の舌状部を3条の溝によって断ち切る形で構築されており、舌状部先端部には平坦面が作出されている。一方、ガッタンコ2チャシは舌状部東側にL字状の溝を1条めぐらせて構築されている。2つのチャシが近在し、また貝塚も確認されている状況を考慮すると、2004年度の調査で検出された送り場遺構以外にもアイヌ文化期の遺構が本遺跡周辺に広がる可能性が高い。また砂丘南側には、縄文中期以降の遺物が検出されている尾河台地遺跡が知られている。

これらの諸点を総合すると、以久科北海岸遺跡は、砂丘上に存在する無数の竪穴群を中心とした複合遺跡である可能性を指摘できる。しかしながら現段階においても遺跡の踏査・測量範囲は遺跡の存在する砂丘範囲の1/5に満たず、遺跡に所在する竪穴の総数やその位置についても十分に把握されてはいない。遺跡の全体的な構造と規模を把

握するためにも、詳細な測量図を含めた基礎的研究が求められている。

調査体制

2008年度の調査は2004年度と同様、北海道大学と斜里町立知床博物館の共同調査として企画した。また調査の一部は北海道大学の全学教育カリキュラム一般教育演習も兼ねている。

調査主体者: 望月恒子 (北海道大学大学院文学研究科長)。

調査担当者: 加藤博文 (北海道大学大学院文学研究科准教授), 松田功 (斜里町立知床博物館学芸員)。

調査参加者: 布施和洋 (北海道大学大学院博士課程)・今泉和也・権平拓也 (北海道大学大学院修士課程), 山口響・岩波連・内山晋吾・小林彩花・濱野由香里・安田龍平・山添晶久 (北海道大学文学部学生), 酒井泰匡・石原あず沙・芝田亮平・保坂由紀子・松下友寛・寺坂百合子・井上亜耶・山

田康菜・竹井志織・佐藤孝美・田中優作・吉川一真・磯島慧悟・大崎晃嗣・小西絵里奈・高柳伸也・田里礼香・丹野明士・長谷田茜・南川和奈・和泉雄介・桶本裕介・西森朝美（北海道大学全学一般教育演習受講者）、千色出（東海大学大学院修士課程）。

調査の概要

2008年度の調査においては、(1)砂丘上に展開する堅穴群の確認と、(2)周知の堅穴群の測量調査、(3)テストピットによる堅穴群の時期の確定という3つの課題を設定した。

堅穴群の広がりについては、2004年度に報告した堅穴I群と堅穴II群から更に谷を挟んで東に位置する砂丘列の先端部に新たに8軒の住居址の凹みを確認し、堅穴III群とした。また堅穴III群から東へ沢を挟んで堅穴IV群および堅穴V群と呼称する堅穴群の凹みのまとまりを確認することができた。2008年度に新たに確認した堅穴軒数は67軒であり、2004年度の段階で確認されていた32軒と合わせて合計99軒の堅穴を確認したこととなる。なお新たに確認された堅穴の表記については、2004年度の報告からの通し番号によって設定している。

堅穴群の測量については、堅穴III群のみの実施となり、機材や調査期間の関係から堅穴IV群と堅穴V群の測量調査については次年度以降に実施予定である。

すでに2004年度に測量調査を終えている堅穴I、II群については、テストピットによる堅穴の時期確認を行った。試掘は個々の堅穴の窪みの壁際に1×1mないしは、1×2mの試掘区を設定し、堅穴内部の堆積状況と出土遺物・火山灰の被覆状況等を確認した。ただし、2004年度にヒグマの送り場とトビニタイ土器が検出された3号堅穴と4号堅穴に関しては2004年度の調査区を延長する形で試掘区を設定している。本年度に試掘を実施した堅穴は堅穴I、II群のうち、3-5、7、23、31、32号堅穴の計7軒である(図3、4)。

成果

1. 堅穴III群の測量調査

2008年度から測量図作成において正確な座標位置を確認するために国土座標に基づく測量基準点の設置を行った。測量基準点の設置に際しては、網走市益村測量設計株式会社に委託している。基準点はRTK-GPS(VRS方式)を用いて、堅穴I群周辺に2点設置した。その後、トータルステーションを用いて、堅穴I群より約400m西方の堅穴III群まで基準杭を移動し、国土座標に基づいた堅穴III群周辺の詳細地形測量を実施した。堅穴III群では33-40号堅穴まで合計8軒の堅穴が確認されているが、堅穴自体のプラン平面図作成は、平板測量図を組み合わせている(図5)。

堅穴III群は北西-南東に斜行する砂丘列の中の一つの尾根先端部に位置する。尾根先端部は平坦面となり、東西に標高が異なる2つの段丘から形成されている。西側部分の平坦面は標高12-13.5mを測り、33-35号堅穴までの合計3軒の堅穴が確認されている。33、34号堅穴は1辺5m四方の中型の堅穴で、現地表面からの窪みの深さはそれぞれ40-80cmを測る。35号堅穴は1辺7.0-7.5m四方の大型の堅穴で、現地表面からの窪みの深さは1mを測る。東側平坦面は西側平坦面より東に20mほどの地点にあり、標高は14-15.5mを測る。東側平坦面には36-40号までの5軒の堅穴が立地する。堅穴の規模は38号堅穴のみが1辺5m以下の小型の堅穴であり、それ以外は1辺6-7mの中型の堅穴である。現地表面からの窪みの深さは36、37、39号が50-80cm、38、40号が90-100cmを測る。堅穴の平面形は全て隅丸方形である。このように堅穴群が異なる段丘面に形成される立地の様相は堅穴II群の選地と類似する。

また、堅穴III群より東方に堅穴IV、V群が新たに確認されたが、それらの中には砂丘の尾根上に直線状に形成される堅穴群と、堅穴II、III群のように段丘平坦面に形成される堅穴群などそれぞれ立地傾向に差異が認められた。堅穴IV、V群に関しては、未測量のため詳細を論ずることはできないが、来年以降の調査によって明らかにしていきたい。

2. 試掘調査

a) 3号住居址

3号住居址は2号住居址の北側に位置する小型の住居址である。窪みは隅丸方形を呈し、縦横の長さは5 mを測る。2004年度には送り場と考えられるヒグマの頭骨の集中が住居址南西部のTa-a直下より確認された。2008年度は送り場の広がりを確認する目的で、北東方向に図6のような試掘区を設けた。その結果、Ta-a直下の2層上面からヒグマの下顎骨の一部など3点の骨片が検出された。これらは2004年度に確認したヒグマの頭骨と同一個体である。

さらに火山灰より20 cm下から、竪穴住居の床面直上の生活面と考えられるやや汚れた黒褐色砂質土(3層)と、その下に固く引き締まった住居構築面を確認することができた。

生活面(3層)直上からは北東-南西方向に長軸を持つ2列の炭化材とともに、図6-1に示した擦文の高坏が口縁部を下にして伏せた形で出土している。高坏は口径18.5 cm、器高9.8 cm、底径5.4 cmを測る。器形は胴部が曲線的で口縁部が外反する。器壁は5 mmと薄く、焼成は良好である。文様は胴部上部には1段の短刻文が施され、胴部下半には3段の綾杉文が施文される。また、脚部には7条の横走沈線が施される。胴部の施文は上位の短刻線から順に下位へと行われている。調整は口縁部周辺には内外面ともに横位のミガキがみられ、内面下部には縦位のミガキが施される。器形や文様の特徴から塚本編年(塚本2002)の8期に相応すると考えられる。また、覆土より摩周b降下軽石(以下Ma-b5として表記する)が検出されなかったため、竪穴はMa-b5被覆後に構築されたものと考えられる。

b) 4号住居址

4号住居址は3号住居址の南東に隣接する中型の住居址である。1辺の長さはおおよそ7 mを測る。2008年度は2004年度の試掘区を北方向に延長する形で竪穴の窪み南西部に1×1 mの試掘区を設定した。2004年度の調査では口縁部から胴部までが1/2程度残存するトビニタイの中型甕1点と

トビニタイ土器の口縁部破片2点が検出されている。また、土層断面からMa-b5を掘り込んで構築されたことが確認されている。

本年度の調査では表土より20 cm下からはTa-aが確認された。また、竪穴覆土は砂質土層で、3層極暗赤褐色土層からはトビニタイ土器が2個体検出されている。

図7-1は完形の中型甕である。トビニタイ土器の菊地分類I群と考えられ(菊池1972; 大西1996)、トビニタイ後半期に属するものと考えられる。2004年度の試掘時に出土した1/2程度残存の口縁部と接合した。底部及び胴部片と口縁部の一部が住居址覆土下部において倒置した状態で出土した。口径17.6 cm、底径2.9 cm、器高16.0 cmを測る。口縁部は大きく外反するが肥厚せず、頸部はほとんどすぼまらない。口縁部には刻みの入った貼付文が2条施文されている。胴部にも刻みの入った貼付文が2条施されるが、2条の貼付の間には、さらに上の貼付に接するような三角形の沈線と2本の縦位の沈線に区切られた格子状の斜行沈線、下の貼付に接するような三角形の沈線があり、その3つが1組となって、胴部周りに3単位で展開されている。器壁は6 mmと薄く、焼成はやや良好である。外面には口縁部の2条の貼付の間に横位のミガキが、胴部下半には縦位のミガキが見られる。内面も同様に口縁部付近には横位のミガキが、内面下半には縦位のミガキがそれぞれ認められた。外面の底部から胴部付近には炭化物が付着している。内面の一部に輪積み痕が見られる。

図7-2は小型の甕である。図7-1と同じ3層から出土した。口径は9.6 cm、器高9.2 cm、底径3.2 cmを測る。口縁部から胴部まで2/3が欠損している。

器壁は薄く5 cmを測る。器形は口縁部がほとんど外反せず、頸部もほとんどくびれない。底部は丸く窄まる。焼成はやや良好であり、1の中型甕に類似する。炭化物は内外面ともに付着していない。器面調整は外面胴部に縦方向のミガキが認められるが、内面には見られない。口唇部は外側に向けてなでられている。底部の形状からトビニタイ土器と考えられるが、口縁部が外反せず、無文

である点など、特異的な部分も認められる。土器全体から受ける印象としてオホーツク文化の土器の作りに近いものがある。

c) 5号住居址 (図8)

5号住居址は6号住居址の南西に位置する1辺5m前後の中型の住居である。竪穴の窪みの北側に1×1mの試掘区を設定した。Ma-b5は被覆せず、出土遺物も検出されなかった。表土から50cm下に床面が検出されたが、床面直上には厚さ5cmほどの厚さをもつ炭化物層が確認されたことから焼失住居の可能性がある。

d) 7号住居址 (図9)

7号住居址は4号竪穴と6号竪穴の西側に隣接する1辺5m前後の中型の住居である。竪穴の窪み中央部と北西部に1×1mの試掘区を2箇所設定した。堆積状況は表土直下にTa-aを被覆し、表土から50cmほどで床面に到達した。出土遺物もなく、Ma-b5も確認されなかった。

e) 23号住居址 (図10)

23号住居址は竪穴II群の西側段丘面、24号竪穴の北側に位置する。1辺6m程度の中型住居である。竪穴内部中央部に1×1mの試掘区を設定した。遺物は確認されなかった。堆積状況は表土より30cm下に10-20cm程、Ma-b5と考えられる暗褐色パミスの被覆が認められた。

f) 31号住居址 (図11)

31号住居址は竪穴II群の東側段丘面、30号竪穴の南側に位置し、1辺6m四方の中型住居である。竪穴内部中央東側に1×2mの試掘区を設定した。遺物は確認されなかったが、住居壁面の立ち上がりと壁際の土留めの板材の址と考えられる炭化物集中などが検出された。表土の60cm下から床面が検出されている。壁面からはMa-b5と考えられる暗褐色パミスを掘り込んで構築されていることが確認された。

g) 32号住居址 (図12)

32号住居址は竪穴II群東側段丘面の31号住居址の南側に隣接する。1辺5m弱の小型住居址である。地表面から確認できる竪穴の窪みの南東隅に1×1mの試掘区を設定した。覆土にMa-b5と考えられる暗褐色パミスは確認されておらず、遺物も出土していない。

まとめ

2008年度の調査の概要を以下にまとめる。

1. 竪穴群の広がりについて

新規に67軒の竪穴を確認することができた。これらの立地の特徴として現段階において、(1)砂丘の尾根上に直線状に並んで立地する竪穴群と、(2)砂丘の段丘上平坦面に立地する竪穴群との大きく2つの立地上の傾向を指摘できる。

また竪穴群は、現在のところ海側の砂丘の先端部に群集して分布する傾向を示している。内陸側に広がりを確認することはできない。この傾向がこの遺跡全体に及ぶものかどうかを確認する必要がある。

2. 竪穴群の帰属時期について

竪穴群の帰属時期としては、約1000年前と推定される摩周b降下軽(Ma-b5)を鍵層として新旧2つに分かれることが明らかとなった。すなわち、Ma-b5降下以降に構築された竪穴は3-5, 7, 31, 32号、Ma-b5降灰以前に構築された竪穴は23号となる。このようにとりわけMa-b5で覆土が被覆されている竪穴については、この地域のオホーツク文化の終末や擦文文化との接触状況を考える上で貴重な資料と見ることができる。また本遺跡における時期的な集落の継続性と変遷を考える上でも興味深い資料である。

出土した資料から見ても擦文文化の高坏を出土した竪穴とトビニタイ文化の土器を出土した竪穴が隣接するなど文化接触の実態や集落内での様相を考える上で興味深い資料が示されている。今後、土器の胎土分析や製作技術の比較研究を行う必要がある。

今後の課題

次年度も本遺跡における調査は継続する予定であるが、目下次の諸点を課題として想定している。

- 竪穴IV, V群の測量調査
- 砂丘東部, 南部における竪穴の有無の確認, とりわけ内陸部での竪穴の有無の確認
- 住居掘り上げ土からみた2-4号竪穴の切り合い関係の確認。

遺跡の面積は広大であり, 限られた期間での調査という限界はあるが, 地道な継続作業の蓄積によって本遺跡の実態解明に微力ながら寄与していきたいと考えている。今後とも関係諸機関からのご支援ご助力をお願いしたい。

謝辞

調査の実施にあたり斜里町立知床博物館をはじめとして, 国有林内への立ち入りと作業行為の許可に当たっては北海道森林管理局網走南部森林管理署に, 国土座標の設定に際しては網走市益村測量設計株式会社に格別の御配慮をいただいた。記して感謝申し上げる。

引用文献

荒田治・上野幸一・内山幸則・長内優之・金子秀

- 司・佐々木敏史・沢田典孝・下井克・十田隆一・竹之下典祥・中島友文・中村誠・望月光則・守屋以智雄. 1979. 斜里平野の地形. 知床博物館研究報告1: 31-40.
- 大井晴男. 1984. 斜里町のオホーツク文化遺跡について. 知床博物館研究報告6: 17-66.
- 大西秀之. 1996. トビニタイ土器分布圏における“擦文式土器”の製作者: 異系統土器製作技術の受容にみる集団関係. 古代文化48(5): 48-62.
- 加藤博文・松田功・木山克彦・布施和洋. 2005. 斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第1次報告. 知床博物館研究報告26: 61-70.
- 菊池徹夫. 1972. 第三章第三節トビニタイ土器群について. 東京大学文学部考古学研究室(編), 常呂. pp. 447-461. 東京大学文学部, 東京.
- 佐藤孝雄. 2005. 斜里町以久科北海岸遺跡のヒグマ頭骨. 知床博物館研究報告26: 71-76.
- 塚本浩司. 2002. 擦文土器の編年と地域差について. 東京大学考古学研究室研究紀要17: 145-184.
- 町田洋・荒井房夫. 1992. 火山灰アトラス: 日本列島とその周辺. 276 pp. 東京大学出版界, 東京.

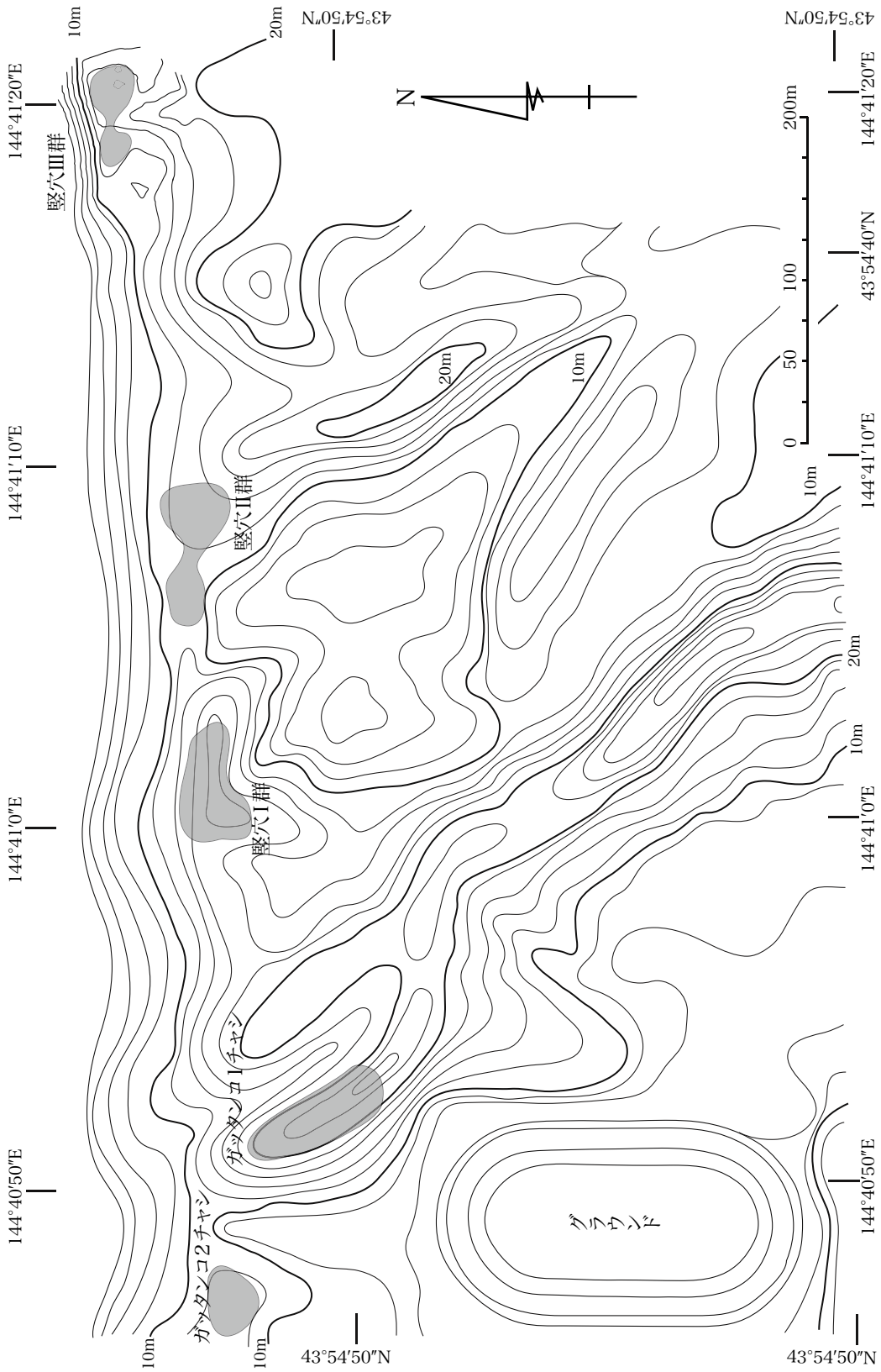


図2. 以久科北海岸遺跡広域地形図.

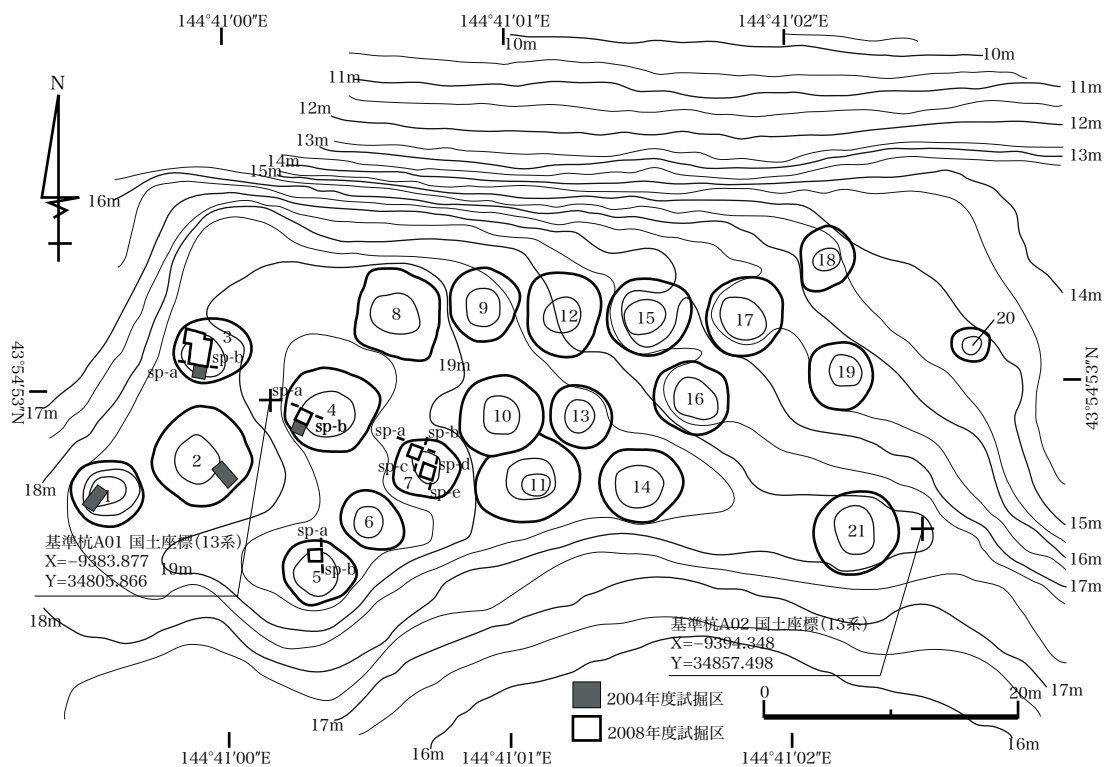


図3. 調査区配置図(竪穴I群).

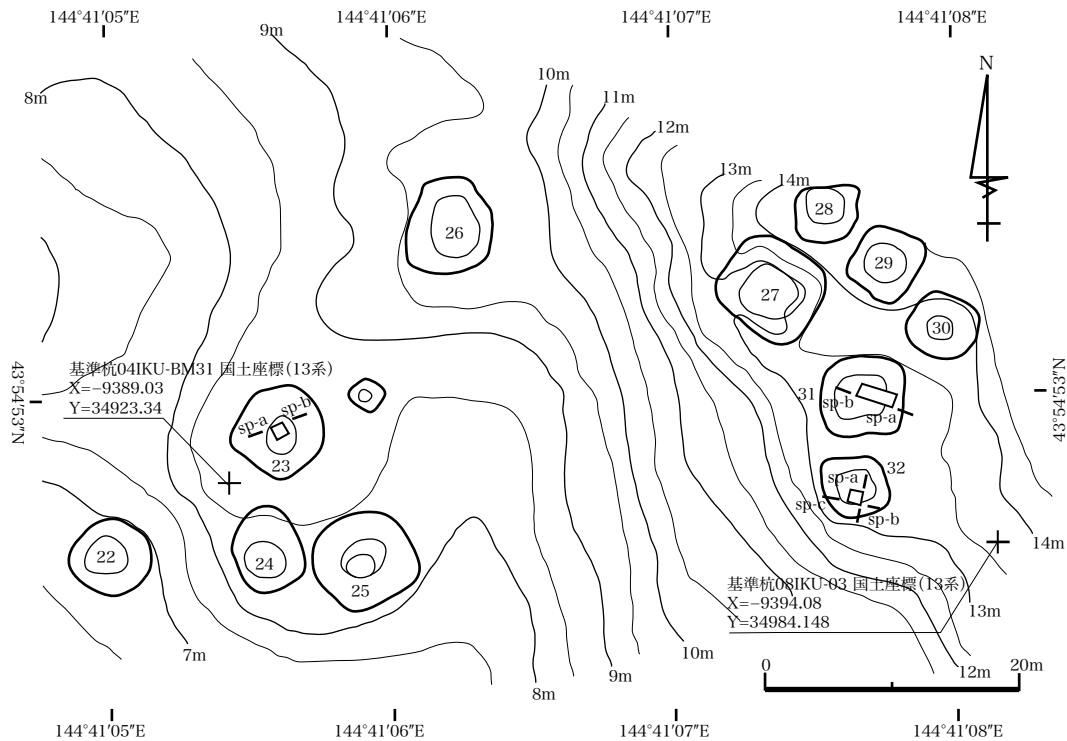


図4. 調査区配置図(竪穴II群).

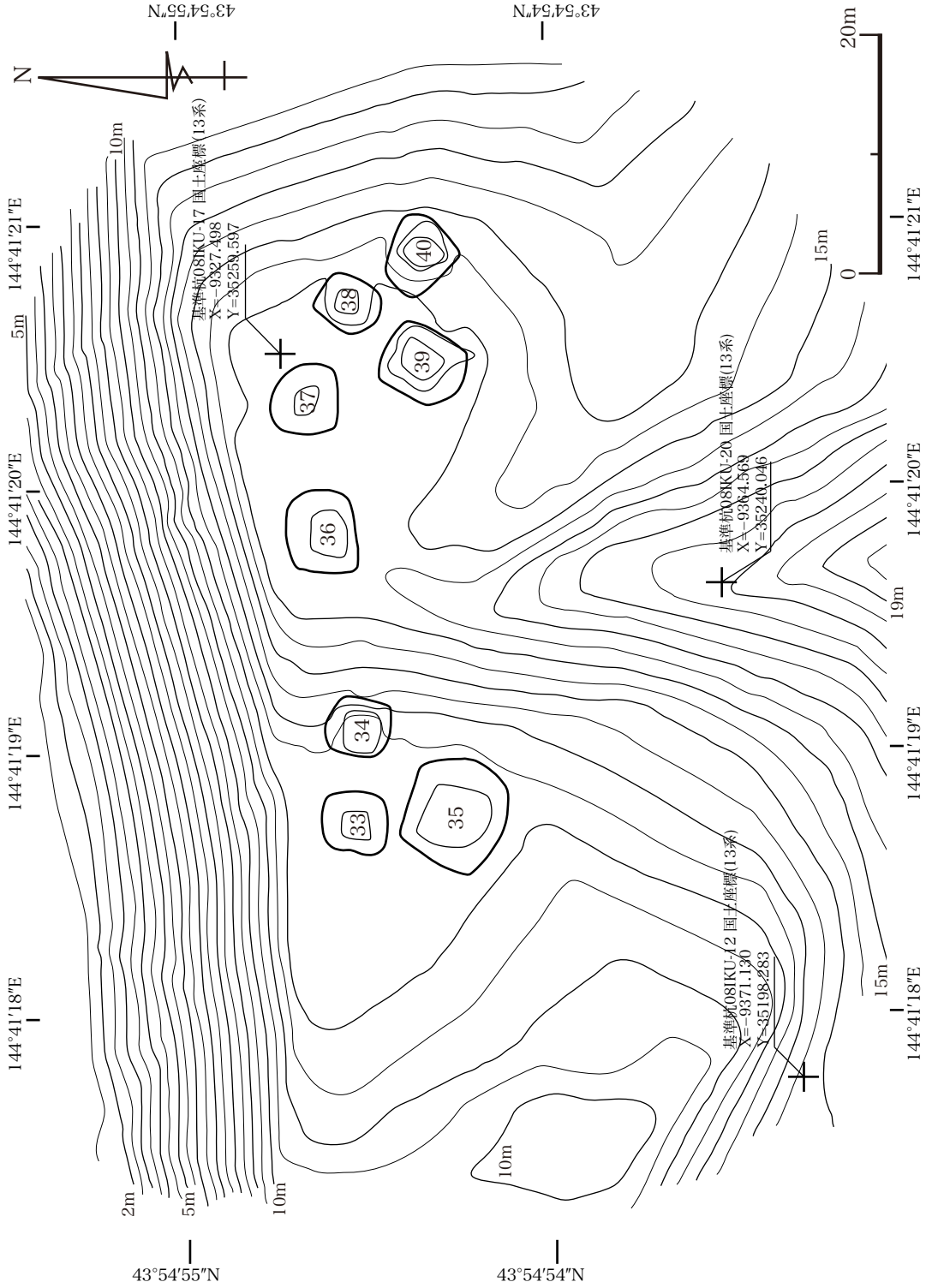


图5. 竖穴Ⅲ群地形測量図.

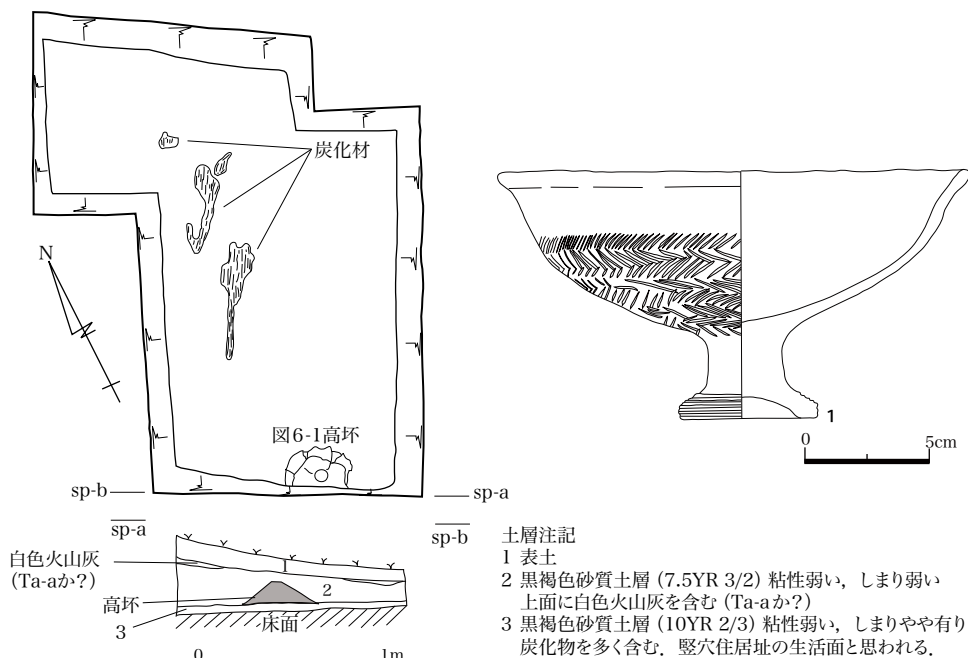


図6. 3号住居址トレンチ平面図, 断面模式図, 出土遺物.

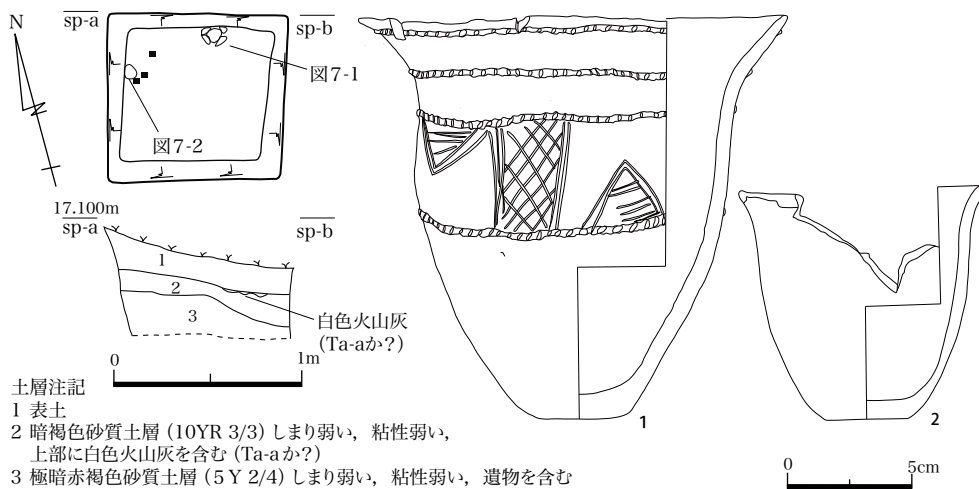


図7. 4号住居址トレンチ平面図, 断面図, 出土遺物.

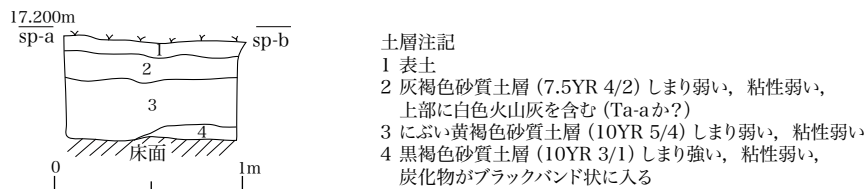


図8. 5号住居址トレンチ断面図.

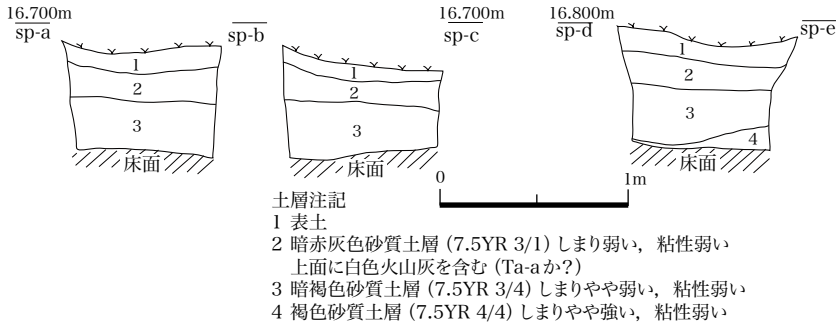


図9. 7号住居址トレンチ断面図.

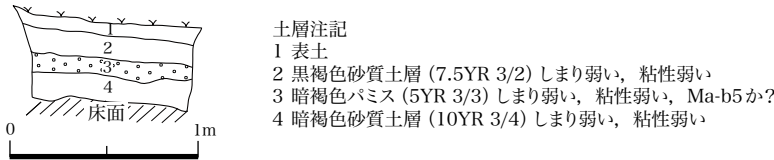


図10. 23号住居址トレンチ断面図.

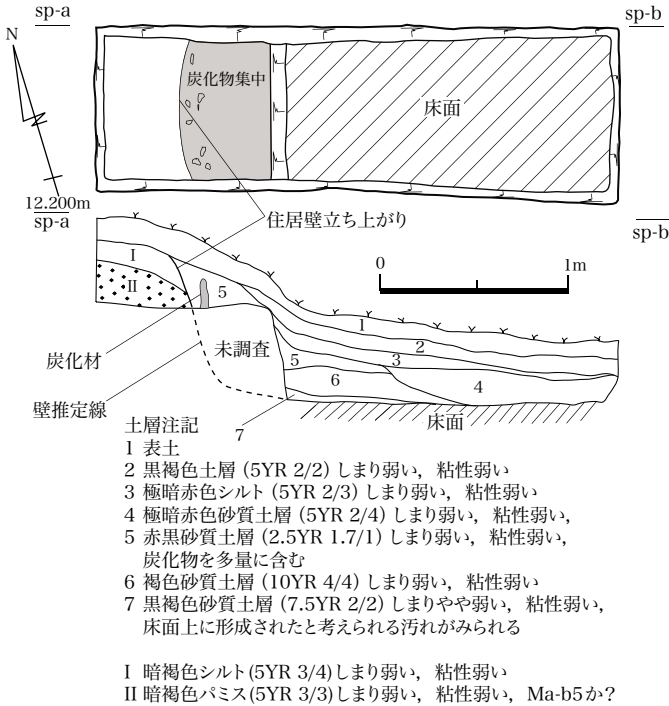


図11. 31号住居址トレンチ断面図.

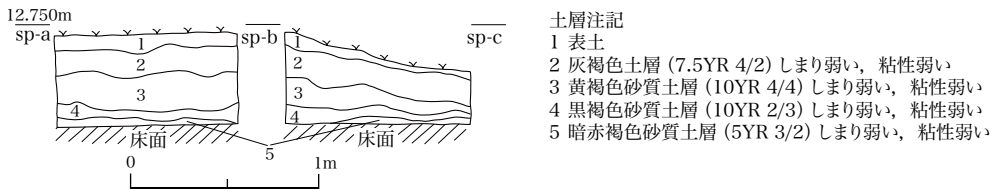


図12. 32号住居址トレンチ断面図.

